

俳句雑誌

空

空

令和4年12月20日発行

第20巻4号

通巻第104号



2022・12

**SORA** 104号

賢者

柴田佐知子

世帯主となりて独りや胡桃割る

正面を生者に向けて桃供ふ

人溶かす匂ひと思ふ白桃は

すべて言ふつもりなど無し林檎剥く

晴れ渡る夜空となりぬ氷頭臈

―「俳壇」十月号掲載より―

海峡に百艘の水尾秋高し

鬼やんま捕れず大人になりきれず

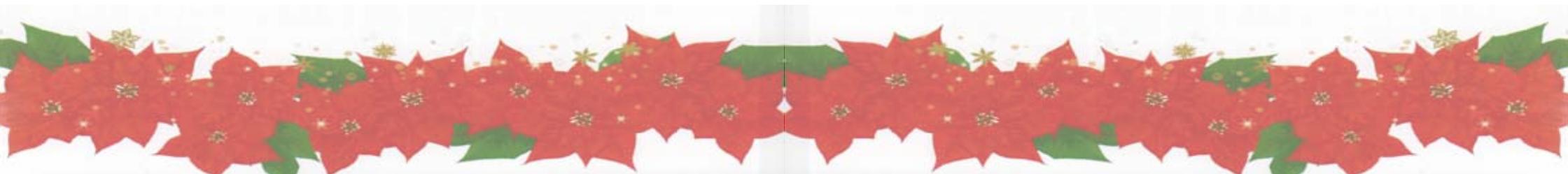
蝸や廃園に立つ阿弥陀仏

昼の虫女の幅の勝手口

摺り足となるまで老いて月祭る

東より月も賢者も現るる

不知火の一つ幽霊図へ戻る



福岡 高倉 和子

東京 中田みなみ

初夏の岩に分かるる魚の群れ

キャンプ村星の話に輪の生れ

熔岩の居座つてゐる夏野かな

キャンプ村更けて星空の怖ろしき

袋掛終へたる島の角ばりぬ

御岳より夜涼下りくる鬼太鼓

黒板の化学記号や夏盛ん

湯祭の祝詞硫気に乗るゆけり

背を向けてしまへば終る夏夕べ

睫毛の窮深く踊りの出番待つ

噴水のかたまり落ちて止まりけり

叱る顔拗ぬる子の顔夜店の灯

確かむるやうに山見る帰省かな

山蟹の赤脚走る夏の霧

生身魂声も体も揺れてをり

囀跳んで小雨の生臭き

長崎 荒井千佐代

埼玉 服部 早苗

川は蛇行水路は真すぐ麦の秋

かばかりの土に根を張りすみれ濃し

裏口に釣果の届く端午かな

うつつと花房重し戦絶えず

箱庭にグランドピアノ収まりぬ

たちまちに川幅となる花筏

螢を握りすぎたり死なせけり

上履きのよく乾くなりチューリップ

教会で恋せしことも花ユツカ

朧夜の糸をとらへし糸切歯

蝉の穴のぞく隣の穴を踏み

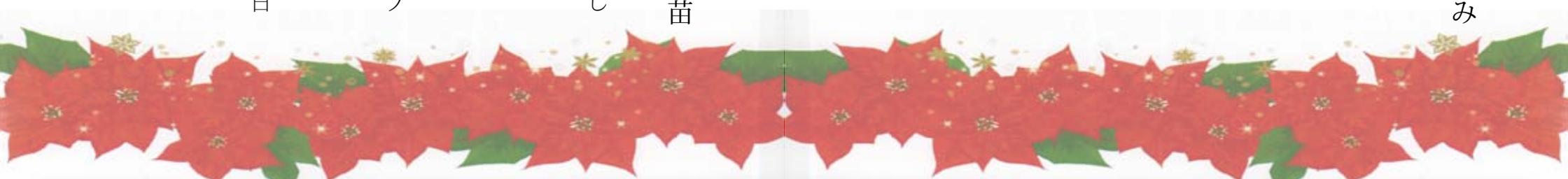
余熱もて溶けゆくチーズこどもの日

余り苗遠流の島のごとくあり

二の腕に風のちくちく麦青む

たかななの食べ頃の山売れにけり

旅を恋ふ明日香は乗込鮎のころ



北九州 深川淑枝

隠沼に満ち干のありぬ紅椿

沼波の岸を洗ひぬほととぎす

花椎のにほひに昏み沼の色

落ち羽根に星の斑ありぬ青葉木菟

はんざぎや伏流水に刃物の香

山を出て艚となりたる木雲の峰

海芋帆の白さ火星に運河跡

旅はいま腐草蚩となる水辺

広島 戸栗末廣

三輛車花冷え乗せて返りけり

現はれて赤子のやうな春の月

花虻の飛び交ふ音の濡れぬたる

春昼や鯉が浮いたり沈んだり

城跡の深き楔や鳥帰る

朝すでに顔に日のさす夏わらび

なかんづく原爆ドーム明易し

父のこと聞くまくなぎを払ひつつ

福岡 角野良生

風にまだ芯の残りて二月尽

酒搾る尺余の撥ね木軋ませて

蔵開き酒饅頭も蒸し上がる

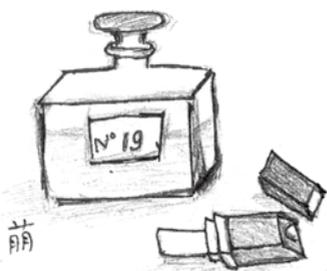
渦潮を追ふ渦潮や桜鯛

春風も草に絡めて牛の舌

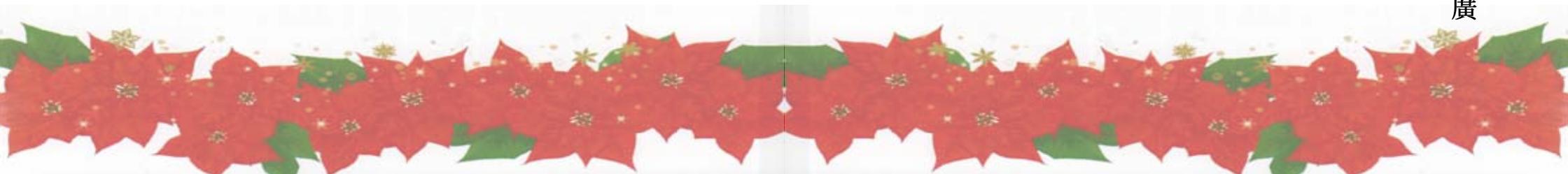
竜天に地にサラブレッドの疾駆

また一人独り遍路のゆきにけり

あたたか茹で卵にもある笑窪



萌



福岡 栗原京子

宮大工梯子の落花まづ払ふ  
花吹雪風の形にふくらめり  
せせらぎにさらはれてゆく花筏  
菜の花や遠国のごと山なみは  
拾ひ来し猫の子すぐに隠れけり

須恵 苑 実 耶

花曇り葉のあとのチョコレート  
風光る生命線の手首まで  
薫風や寝ることに飽き退院す  
桜蕊降る退院の車椅子  
退院の葉売るほど燕来る

糸田 宮井知英

秋に入る水爽爽と掌を離れ  
指貫にからみし母の木の葉髪  
登り来て父よ母よと墓洗ふ  
祖の森は抜道ばかり藪茗荷  
村中の鴉の狙ふ木守柿

岡垣 田中とし江

航跡を重ねる渡船夏来たる  
老鶯や水平線は目の高さ  
黒南風やバス折り返す砲台跡  
島裾に花大根の道続く  
桶蹴りて引つづく鮑剥がしけり

粕屋 吉田 葎

南風や上官ばかり生き残り  
大木に裏の顔あり秋の風  
足取つて大物倒す草相撲  
秋うらら奥へ奥へと金物屋  
一話ごと深くうなづく盆の客

直方 石橋幾代

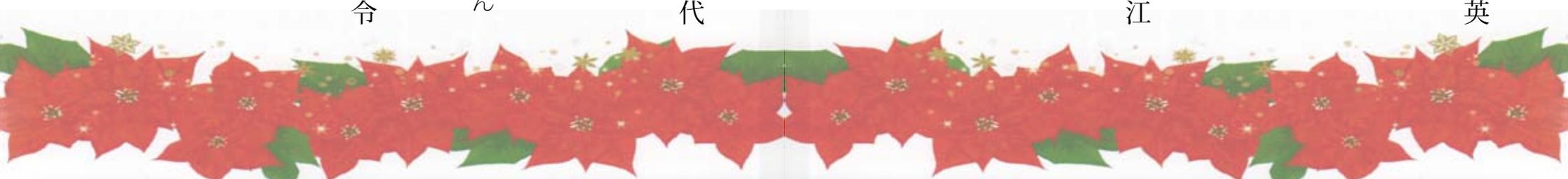
うつし世を覆ひてしまふ夜の桜  
大滝の全長見えぬほどけふる  
急くこともなくて見てゐる金魚玉  
なんとなく諭されてをり水やうかん  
蒼ざむる湖へ花散りにけり

太宰府 山本則男

旧道に豆腐屋二軒初ざくら  
揚雲雀空の青さに入りびたり  
花冷や少し錆びたる肥後守  
廃屋のかたちとなりぬ蔦若葉  
峰入りのわらぢ十ほど干してあり

福岡 秋津 令

盆用意水たつぷりと使ひけり  
帶少しゆるんでゐたる盆の僧  
秋灯や地図を拡ぐるのみの旅  
友寄りて愚痴の出てくる栗羊羹  
稻雀となりて仲間に入りたし



福岡 永淵 恵子

ボート漕ぐオールも恋もままならず  
朝涼の波止より島の動きだす  
一徹のブランドとなる苺かな  
一列に退る菅笠田植唄  
草笛の素頓狂な音の出で

東京 山田 正子

崩し字の詫び状届く藤の雨  
緋牡丹の一輪で足る艶やかさ  
蓮見舟しばし浄土に遊びけり  
残照やへミングウェイは帆をたたむ  
水中花咲いてしまへばつまらなし

大野城 森 田 明 成

旅先の軽めの食時麦の秋  
参道の空高めゆく新樹かな  
戦ある世に棒立ちのアマリリス  
不明者は同じ名字や夏出水  
苗の列ゆがみて終はる御田祭

福岡 三井所美智子

蔓薔薇を少しほぐして風通す  
水面より雨の降り出す花ぎぼし  
蝶を追ふ児を追ひかけて父若し  
夏ひばり米寿の姉の畑仕事  
緑陰や老人会の折詰弁当

北九州 河 原 敬 子

止り木の爪痕著し青葉木菟  
羽毛に埋まる首よく動く青葉木菟  
ももいろの小さき舌見せ青葉木菟  
行々子鳴くや田水を震はせて  
地の雲雀ときに金切り声発す

兵庫 林 徹 也

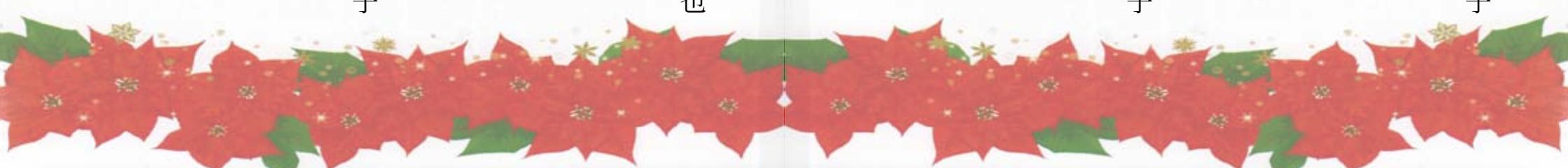
手拍子に赤子寝返る夏座敷  
緑さす廃銀山の無縁墓  
十葉に囲まれ母の三回忌  
十葉を一輪挿に外厨  
妣の椅子たたみて終る草むしり

直方 曾 根 富 久 恵

床下に瓦と箒彼岸寺  
綿菓子屋のテント膨らむ春祭  
唇のまこと分厚き桜鯛  
剪定や先づは脚立を補強して  
鳶青し世界遺産は河の側

千葉 原 友 子

姫女苑休みぬし田に水満ちて  
山藤や履物正す檀家衆  
蟻地獄農小屋はわが玉手箱  
輪郭を忘れてなんじやもんじや咲く  
気疲れのあるやも知れず白牡丹



熊本 松田明子

引鶴を数へて終る鶴倶楽部  
天窓の明かり届かぬ踏絵かな  
古良邸の木所に小さき義上祭  
葺替へし寺に勤行始まりぬ  
全国に晴れの一日こどもの日

大阪 井上和子

花吹雪吉野へ続く無人駅  
囀や水源の水眩しくて  
ゆく春や小銭の遺る頭陀袋  
初夏の地に青竹を地鎮祭  
上棟に祀る御幣や夏燕

長崎 松尾龍之介

ノンちゃんと歩いてみたし花の雲  
産毛ふはふは豆飯の湯気の中  
葉桜や定規はみ出すランドセル  
見てくれはベジタリアンの天道虫  
死は生者のみにもたれて花茨

大阪 田岡千章

緑青の屋根と競ひぬ紫木蓮  
眉をひく眼の険し春の宵  
桜糞降るや火傷の治療遅々と  
蚕互の花の黒子を艶とせむ  
愚図る子へ風船細工の犬即興

広島 星加鷹彦

古布を截つ八十八夜の風入れて  
文豪の握りの太きペン暮春  
渾渾と富士の湧水今朝の夏  
この街の夏は河より来たりけり  
きりもなく風の持ち来る卯波かな

北九州 横田敬子

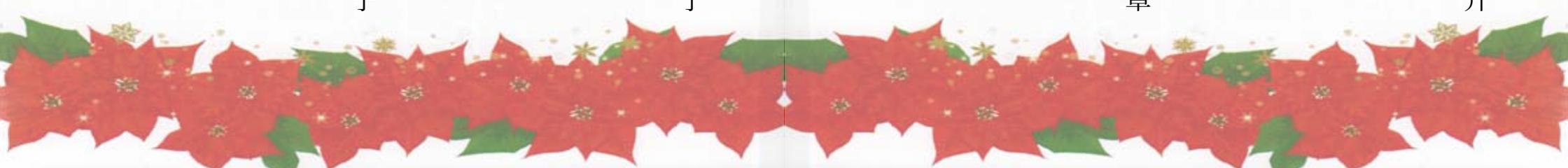
木洩れ日に首立ち上げてまむし草  
せせらぎの音に目覚むる山桜  
農園に椅子置かれあり百千鳥  
園児等を追ひ越してゆく紋白蝶  
止まるたび春風乗せて通園バス

福岡 あさなが捷

抜刀の先は観客菊人形  
空と海とろろり熔かす冬夕焼  
まよひなく母うたひきる手毬唄  
二番より歌詞のあやしき手毬唄  
狼煙台跡へ向日葵立ち上がる

大宰府 西住三恵子

石段の高きにくらむ山開  
手術痕の不意の痒さや蝉しぐれ  
子は遠くどの家も一人明易し  
無人駅染めむばかりに桜糞  
ふんはりと夏菜束ねて道に売る



兵庫 大西 乃子

さくらさくら時のとまりぬ吉野山

夜明けまでせせらぎの音花の宿

菜の花が咲いてゐるなか戦など

白壁は家老の屋敷夏つばめ

はたた神携帯電話震へだす

兵庫 岩井 京子

餌を貰ふ鯉に鯰の割り込みぬ

攻撃は前へ髭出す鯰かな

花束をとくや溢るるカーネーション

冷蔵庫サラダのメモに母用と

語らひもはなやぐ朝の薔薇園は

北九州 坂口 学

岸壁の化石あらはに鳥帰る

諸葛菜咲き仙人掌の洗ひ川

筍を探す足裏とぎ澄まし

先兵は目ざととき子供筍狩

鳥引きて風あるばかり大千瀉

東京 今井 康子

春宵の列車光の箱となる

ポケットに自転車の鍵かき氷

青梅雨や宿の主人はもと猟師

空つぼの宿の引き出し夕焼空

板の間に竹林の風粽解く

北海道 押田 裕見子

夕桜思はぬ方へ散ることも

切崖の日を斬り落すつばくらめ

草に寝て空を間近に花辛夷

逆上りまだ出来るはず春夕焼

タクシーの扉開けある春の昼

直方 古田 悦子

春の夢奈落の底をひた歩く

子どもの日父の自慢のオムライス

蔦若葉ピアノレッスン思ひ立つ

母校までの歩み軽やか春の風

足るを知る母の暮らしや花蘇枋

兵庫 えとう 樹里

ひとり子に十人がかり幟立つ

魚跳ねて光散らばる夏はじめ

五香粉匂ふ街角薄暑かな

母の日の父が絵本を読み聞かせ

新樹より朝日さしくる吉兆か

神奈川 窪み ち子

しやぼん玉追ひかくる子も七色に

しやぼん玉追ふ子いつしか風となる

しやぼん玉吹く子に戦なき世欲し

藻の流れつと盛り上がり鯉の口

木橋渡れば萍がやや動く

北九州

兒玉充代

はつきりと山が見ゆる日燕来る

目につけば拾つてしまふ落し文

花は葉となりけり山の晴れわたる

朝よりの日差し半分濃紫陽花

葱坊主てんでに伸びて風にあふ

兵庫 青木朋子

文のみが届く母の日鳥の声

亡き母と自分にカーネーションを買ふ

カーネーション半額となる月曜日

湖は木々に囲まれ夏に入る

細道のいづれも湖へ風薫る

兵庫

岡村尚子

淋しくて母を思へば花の雨

手を引かれ泣くだけ泣いて入園す

寺裏に山鳩の啼く清和かな

紫陽花の庭に仔犬のかくれんぼ

青々と匂ひてきたる豆ご飯

